

青森県埋蔵文化財調査報告書 第229集

# 三内丸山遺跡Ⅶ

平成8年度

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第229集

# 三内丸山遺跡Ⅶ

—第5次～7次調査概要報告書—

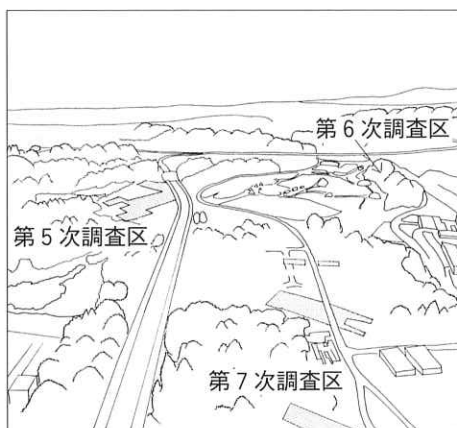
平成8年度

青森県教育委員会



三内丸山遺跡（東から）

〔第5次調査〕



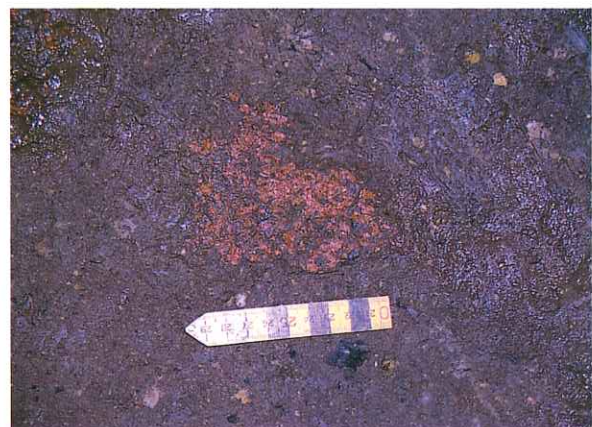
〔第6次調査〕



第5次調査区全景



木柱出土状況



漆器出土状況

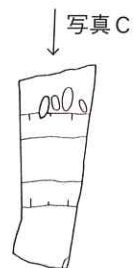
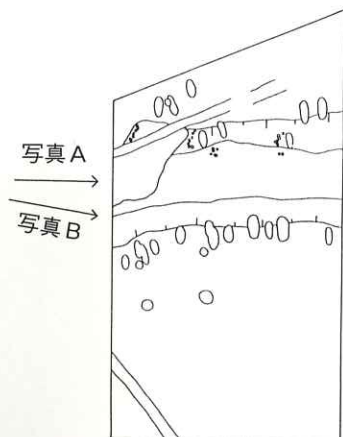
〔第7次調査〕



写真A 土坑墓列検出状況（中央の窪まりが道路跡）



写真B 土坑墓列（南列）



写真C 土坑墓列（北列）

# 序

青森県には縄文時代の遺跡が数多くあり、特に縄文時代前期中葉から中期中葉にかけて繁栄した円筒土器文化の中心地域と考えられております。青森市西部に位置する三内丸山遺跡は、縄文時代前期中葉から中期末葉にかけての大集落であり、青森県は貴重な歴史遺産として保存するとともに広く活用を図るため整備を進めております。

本書は、三内丸山遺跡の集落の規模や変遷の解明を目的として平成8年度に実施した発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、土坑墓列が先年の調査で検出した最西端から355m東方まで延長することが確認されました。また、縄文時代前期から中期にかけての遺物包含層や前期の泥炭層の確認等の成果がありました。

調査の成果は、三内丸山遺跡の整備や学術研究に活用していく所存ですが、これからの埋蔵文化財の保護と研究に役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施及び本書作成に御指導、御尽力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

青森県教育委員会

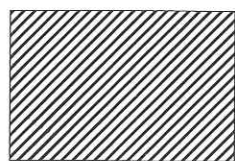
教育長 松 森 永 祐

# 例 言

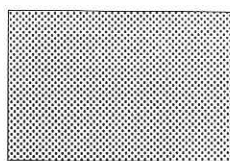
- 1 本報告書は、平成8年度に実施した青森市三内丸山遺跡の第5次～7次調査の概要報告書である。

「三内丸山遺跡」は、従来三内丸山(1)遺跡、三内丸山(2)遺跡、小三内遺跡及び近野遺跡(一部)として登録されてきた遺跡である。これらは、平成4年度から6年度までの調査によって同一の遺跡であることが判明した。平成7年度の調査からは調査名を第1次、第2次調査……と着手順に呼称している。

- 2 三内丸山遺跡の遺跡番号は01021番である。
- 3 本遺跡の遺構番号については種類ごとに平成4年度調査からの通し番号を付してある。
- 4 挿図の縮尺は、各図ごとに示している。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 5 記載にあたっては、柱穴—P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の略号を用いた。
- 6 竪穴住居跡の床面積は壁の下端で囲まれた範囲(掘り方面積)をプランニメーターを使用して計測し、3回の計測による平均値を用いた。
- 7 本書に掲載した地形図(遺跡の位置)は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写したものである。
- 8 遺構内外の堆積土の注記は、「新版標準土色帖」(小山・竹原1990)を用いた。
- 9 出土遺物・実測図・写真等は、青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室が保管している。
10. 図中に使用したスクリーントーンは以下のものを表す。



地 山



柱痕跡

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第 I 章 調査目的及び調査要項	1
第 1 節 調査目的	1
第 2 節 調査要項	2
第 II 章 調査の方法と経過	3
第 1 節 調査の方法	3
第 2 節 調査の経過	4
第 III 章 第 5 次調査	7
第 1 節 調査の概要	7
第 2 節 縄文時代の遺構	11
第 3 節 平安時代の遺構	14
第 4 節 遺構外出土遺物	15
第 IV 章 第 6 次調査	17
第 1 節 調査の概要	17
第 2 節 縄文時代の遺構	19
第 V 章 第 7 次調査	23
第 1 節 調査の概要	23
第 2 節 縄文時代の遺構	24
第 3 節 平安時代の遺構	29
第 VI 章 調査の成果と課題	30
報告書抄録	32

# 第 I 章 調査目的及び調査要項

## 第 1 節 調査目的

三内丸山遺跡は、平成 6 年に保存が決定され、平成 7 年 3 月には青森県総合運動公園遺跡ゾーン整備基本構想が策定された。この基本構想を受け、県教育委員会では遺跡の学術的解明のための発掘調査を継続して行っており、平成 7 年度には文化庁の補助金の交付を受け、国史跡指定に向けての範囲確認調査（第 1～4 次調査）を実施した。

今年度の発掘調査は、文化庁と協議し、集落の広がりの変遷の確認及び環境復元のための資料収集を目的として次の 3 地点（第 5～7 次調査）で実施することとした。

第 5 次調査は南地区（旧サッカー場建設予定地）で、平成 6 年度に試掘調査を実施し、縄文時代中期の住居跡等の遺構、遺物が検出されている。さらにより詳細な、集落の南地区への広がりの変遷を解明するために、面的な試掘調査を実施し、正確な遺構分布の把握を目的とした。

第 6 次調査は第 1 次調査に継続するもので、北地区の沖館川に面した北斜面に形成された縄文時代前期から中期にかけての遺物包含層と前期の泥炭層の精査を目的とした。さらに今後の整備計画策定に向けて、古環境復元のための分析試料の採取も行うことにした。

第 7 次調査では前年度の第 4 次調査に引き続き、北地区の列状に配置された成人用土坑墓の東端の確認を目的とした。

(岡田 康博)

三内丸山遺跡年度毎発掘調査一覧（県教育委員会関係分）

年 度	調査地点と調査目的	調 査 主 体
平成 4 年度	野球場建設予定地本調査	埋蔵文化財調査センター
	第 6 鉄塔地区本調査	〃
	第 7 鉄塔地区本調査	〃
	第 8 鉄塔地区本調査	〃
平成 5 年度	野球場建設予定地本調査	〃
	第 6 鉄塔地区本調査	〃
平成 6 年度	野球場建設予定地本調査	〃
	野球場取り付け道路建設予定地試掘調査	〃
	サッカー場建設予定地試掘調査	〃
	テニスコート建設予定地試掘調査	〃
	近野遺跡地区試掘調査	〃
平成 7 年度	第 1 次調査（北地区、集落の範囲確認）	文化課（三内丸山遺跡対策室）
	第 2 次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	〃
	第 3 次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	〃
	第 4 次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	〃
	近野遺跡地区試掘調査	埋蔵文化財調査センター
平成 8 年度	第 5 次調査（南地区、集落の範囲確認）	文化課（三内丸山遺跡対策室）
	第 6 次調査（北地区、低湿地の調査）	〃
	第 7 次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	〃



## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

三内丸山遺跡の発掘調査を行い、集落の規模や変遷を解明し、今後の保存・活用に資する。

2 調査期間 平成8年5月15日～平成8年11月1日

3 遺跡名及び所在地 三内丸山遺跡  
青森市大字三内字丸山275-1外

4 調査面積 合計 7,626平方メートル  
第5次調査区 5,810平方メートル  
第6次調査区 16平方メートル  
第7次調査区 1,800平方メートル

5 調査主体 青森県教育委員会

6 調査担当機関 青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室

7 調査協力機関 青森市教育委員会  
東青教育事務所

### 8 調査員等

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長（考古学）
	市川 金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査協力員	池田 敬	青森市教育委員会教育長
調査員	高島 成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	山口 義伸	青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員（保存科学）

9 調査担当者 青森県教育庁文化課 三内丸山遺跡対策室

総括主査	岡田 康博
主事	阿部 美杉
主事	斎藤 岳
主事	小笠原 雅行
主事	伊藤 由美子
主事	佐々木真理子
調査補助員	斎藤 勝 本間 順子 若山真由美 土岐耕司

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

調査区は、平成4年度に設定したものに準拠し、20m×20mの大グリッドと、さらに4m×4mの小グリッドを設定した。

小グリッドは、東から西へはA、B、C…とアルファベット順にAからTまで、北から南へは1、2、3…と算用数字を付し、北東の交点で呼称した。東西方向のアルファベットについては、繰り返すこととなるため、その前にローマ数字を付してある。グリッドの南北線は磁北を示している。ベンチマークは既設の工事用測量杭から引用し、必要に応じて原点の移動を行った。

調査は、第5次調査区では遺構分布の把握を目的とし、面的な調査を実施した。第6次調査区、第7次調査区では、包含層の厚さ、土坑墓の分布範囲を調査目的とし、トレンチ法によって遺構を確認した。第5次調査区は、平成6年度にトレンチ法による試掘調査の行われた地区である。また、第6次調査・第7次調査は、平成7年度からの継続調査である。

調査面積の広い第5次調査区では、必要に応じて土層の堆積状況を観察するため、セクションベルトを設け、グリッド単位で掘り進めた。第6次調査区・第7次調査区では、基本土層の観察は調査区壁面を利用することにした。

遺物の取り上げは、グリッド単位、層単位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成しレベルを記録して取り上げた。

遺構の調査は遺構分布の確認を優先し、その構築時期・性格の把握のため、条件のよいものを選び精査することとした。精査は原則として二分法・四分法で行い、堆積土観察用のベルトを設け、土層を観察しながら進めた。遺構内出土遺物は、必要なものについては平面図、標高を記録した。

平面図の作成は簡易遺り方、平板測量により、縮尺は20分の1を基本とし、状況に応じて10分の1、40分の1、その他とした。

遺構番号は、平成4年度からの調査に引き続き、遺構の種類ごとに確認順に付した。

土層の名称は、旧野球場建設予定地で使用した基本層序をもとにし、表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については、上位から下位に算用数字をそれぞれ付すこととした。土層観察及び土色の注記に当たっては「標準土色帳」を用いた。

記録撮影用のカメラは35mm判と6×4.5判を使用し、フィルムは、カラーリバーサルとモノクロームの2種類を使用した。撮影は35mm判では、確認、堆積土の状況、遺物の出土状況、完掘の段階で撮影し、6×4.5判による撮影は、適宜行うこととした。また、ビデオカメラによる撮影も行い、調査経過などを記録した。

(小笠原 雅行)

## 第2節 調査の経過

第5次調査、第6次調査は平成8年5月15日、環境整備、調査区のグリッド・ベンチマークの設定から開始した。

第5次調査、第6次調査とも、表土と過去に調査した部分の埋め戻し土は大型機械を用いて除去し、その後は手掘りで遺構の確認に努めた。

第5次調査区では、調査区西側から遺構確認を開始した。それと並行して、平成6年度に調査した試掘トレンチを再度掘り下げ、遺構の確認を行った。第Ⅱ層中では平安時代の竪穴住居跡を確認し、6月中旬には、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡も確認した。作業は遺構の確認を先行させ、東側へと調査範囲を順次拡張した。

7月下旬には遺構確認が進んだため、竪穴住居跡、土坑の精査に着手した。

8月下旬には、さらに東側と南側へ調査区を拡張し、大型機械を用いた表土の除去を行った。

9・10月は、遺構精査と並行しながら拡張区域の遺構確認を行った。南側では、掘立柱建物跡の可能性のある径1m前後の円形の落ち込みが多数検出され、東側では竪穴住居跡と見られる径3m前後の円形の落ち込みが数基確認された。これらの遺構の精査については、平成9年度以降行うことにした。

第6次調査は、平成7年度に埋め戻した土砂を除去した後、調査区を拡張することから始めた。表土を除去した後、第Ⅱ層黒色土中の縄文時代中期末葉の包含層の精査に着手した。

5月上旬からは、その下層の縄文時代中期前葉から後葉の遺物包含層に着手した。出土遺物が多く、また土がロームの二次堆積で非常に堅いため、調査は難航した。

7月上旬、縄文時代前期の包含層の精査に着手した。湧水が始まり、有機質遺物の出土が予想されるようになった。実際、多量の土器の出土の他に、自然木が出土するようになった。7月下旬には調査区北西壁の縄文時代中期後半の柱穴から、木柱が出土した。確認面が、標高11m前後の台地から下がった地点からの出土で、その機能が注目された。その他に漆器、ヒトの歯、骨刀なども出土した。

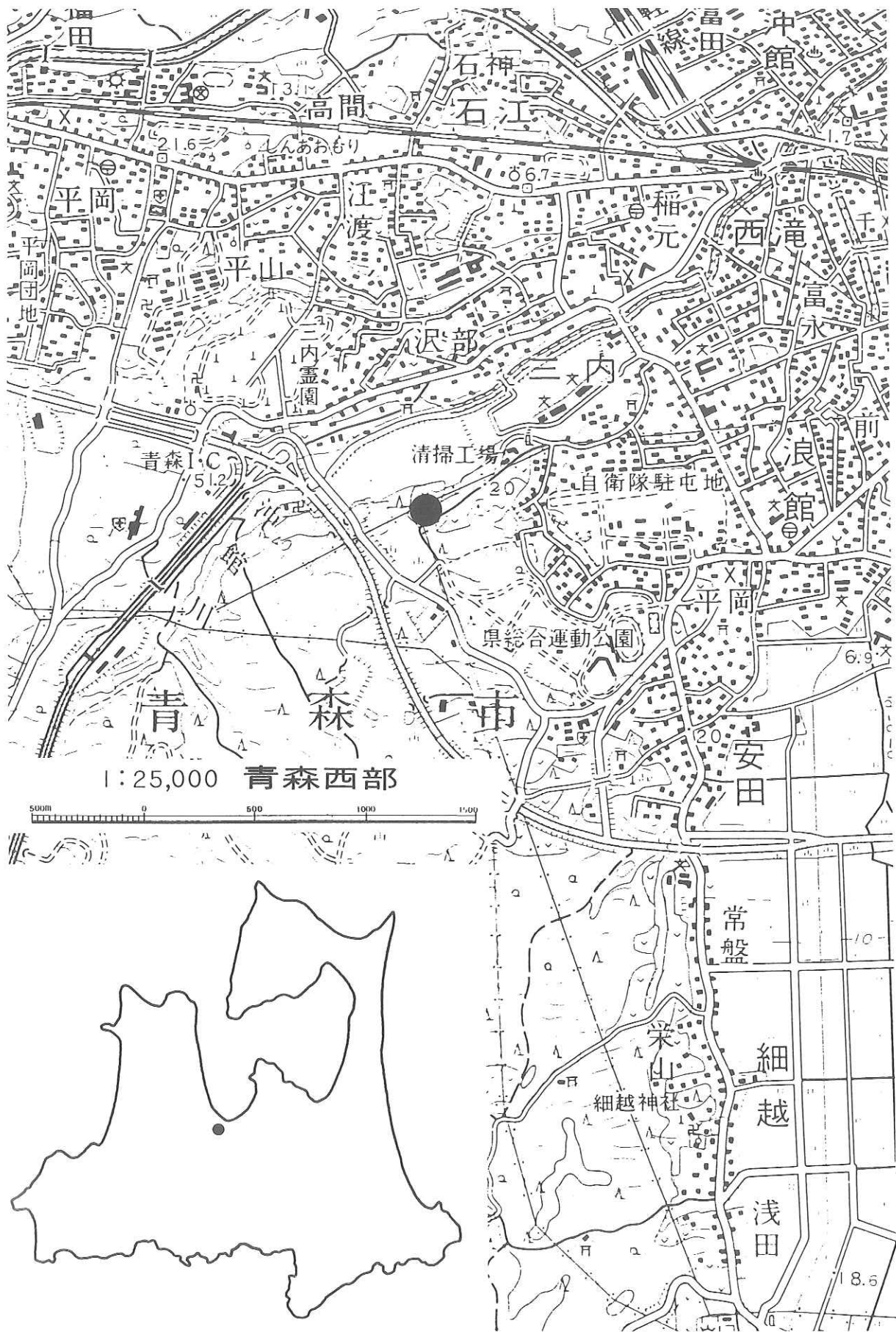
調査が進むにつれ、調査区の深さも増し、排土処理など困難となってきた。また、湧水も一層激しくなり、壁面の崩落も顕著となってきた。9月中旬、台風の影響で大雨に見舞われ、その際、南側壁が大きく崩落した。作業を進める上で危険な状態となり、調査面積を縮小し、地山面の確認を最優先した。

10月9日、第6次調査を終了した。

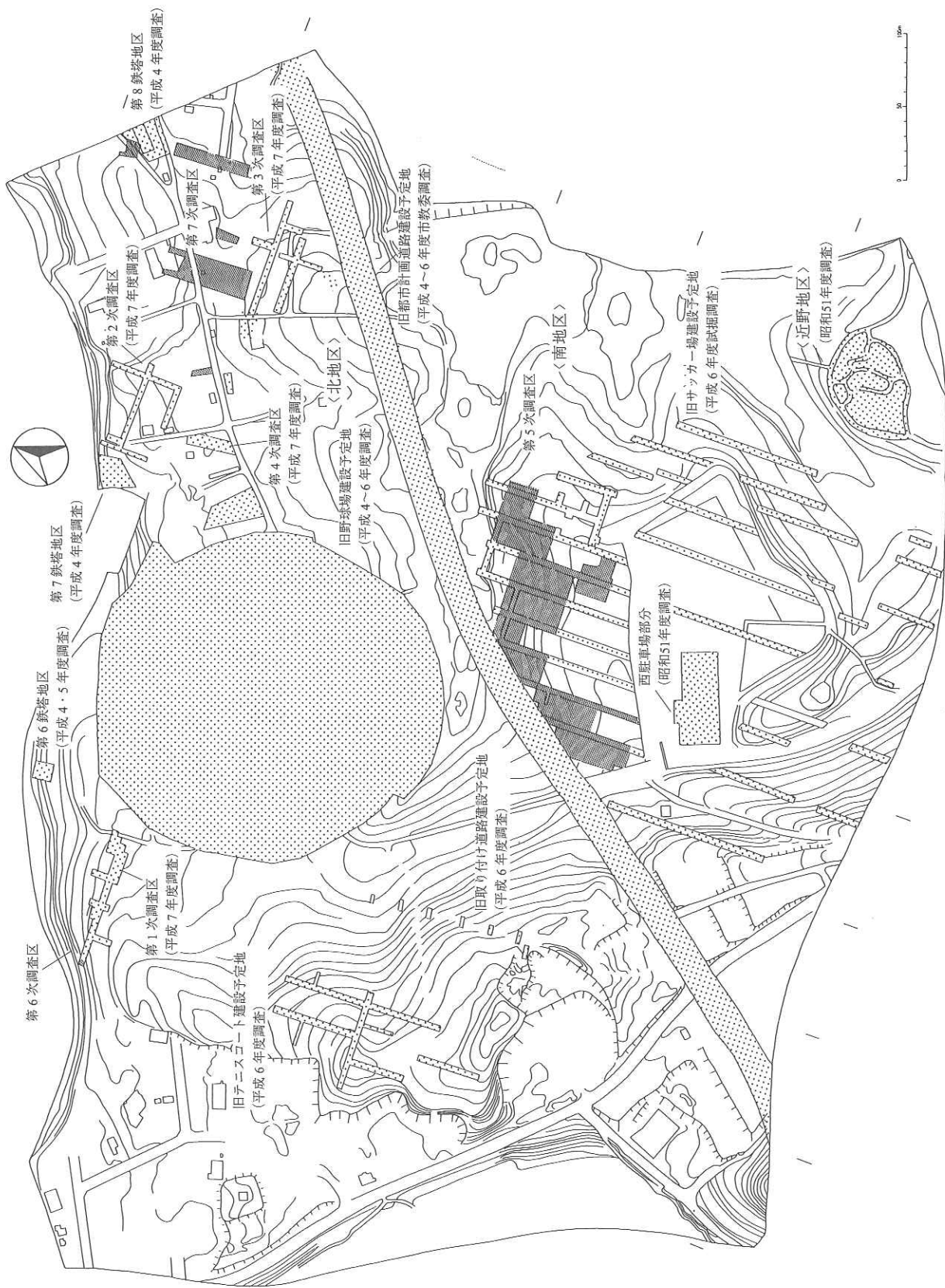
10月11日、第7次調査に着手した。これまで土坑墓が確認されていた尾根筋に沿ってトレンチを設け、徐々に東側へと拡張した。作業はほぼ順調に進んだが、予想に反し、最も東側の部分では尾根筋から大きく外れた台地東端の谷状に落ち込む部分へと土坑墓列が延びており、遺構の確認に手間取った。そのため、2列のうち1列分の確認に止まった。

10月下旬、調査は終了し、埋め戻し作業を行った。11月1月には、来年度に向けた環境整備、調査機材・出土遺物の整理・搬出を行い、今年度の調査をすべて終了した。

(小笠原 雅行)



1 図 遺跡位置図



2 図 三内丸山遺跡調査区配置図

# 第Ⅲ章 第5次調査

## 第1節 調査の概要

本調査区は遺跡の南地区に位置し、平成6年度に4m幅でトレンチ法により試掘調査を実施し、縄文時代中期集落の一部を確認した地区である。この地区における集落の広がりの変遷を詳細に把握するため、面的に5,810m<sup>2</sup>を調査した。出土した遺物は、縄文土器や石器などダンボール箱49箱である。

調査区南側は東西に延びる尾根筋の平坦面に相当するが、調査区の大部分はゆるやかな北斜面となっている。

調査当初はⅣTライン以西の地点と、東西がⅢT～ⅣTラインで南北が140～150ラインの範囲内を調査区域として設定したが、遺構・遺物の分布状況の把握がすすみ、住居跡群及び柱穴群の確認のため東側及び南側に調査範囲を拡張した。しかし、調査後半に着手したこともあり、拡張部分については基本的には遺構確認のみで終了した。

層序は北地区（旧野球場建設予定地）の基本層序と対応するが、第Ⅳ層は確認されなかった。調査区西側北部では第Ⅱ層が比較的厚く堆積し黒色を呈するが、調査区東側では第Ⅱ層は薄くなり、基本的には黒褐色を呈している。

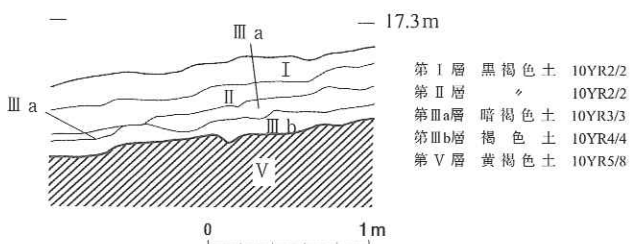
縄文時代の遺構は竪穴住居跡18棟、土坑53基、埋設土器1基、掘立柱建物跡1棟、柱穴133基、屋外炉1基、焼土遺構4基を確認した。うち竪穴住居跡5棟、土坑7基、掘立柱建物跡1棟、柱穴3基、屋外炉1基、焼土遺構4基について精査を行った。竪穴住居跡、土坑、掘立柱建物跡については第2節に記載する。

平安時代の遺構は竪穴住居跡3棟、土坑2基、溝跡1条を確認しており、第3節に記載する。なお、他に時期不明の柱穴を4基確認した。

遺構・遺物の分布状況を見ると調査区西側では縄文時代中期後葉～末葉の遺構・遺物が多数を占め、調査区中央～東側では縄文時代中期中葉の遺構・遺物が多く分布する。

また、遺跡の南側からは、少量であるが縄文時代晩期前葉の遺物が出土した。

(斎藤 岳)



(Ⅲ T-145 ←東壁)



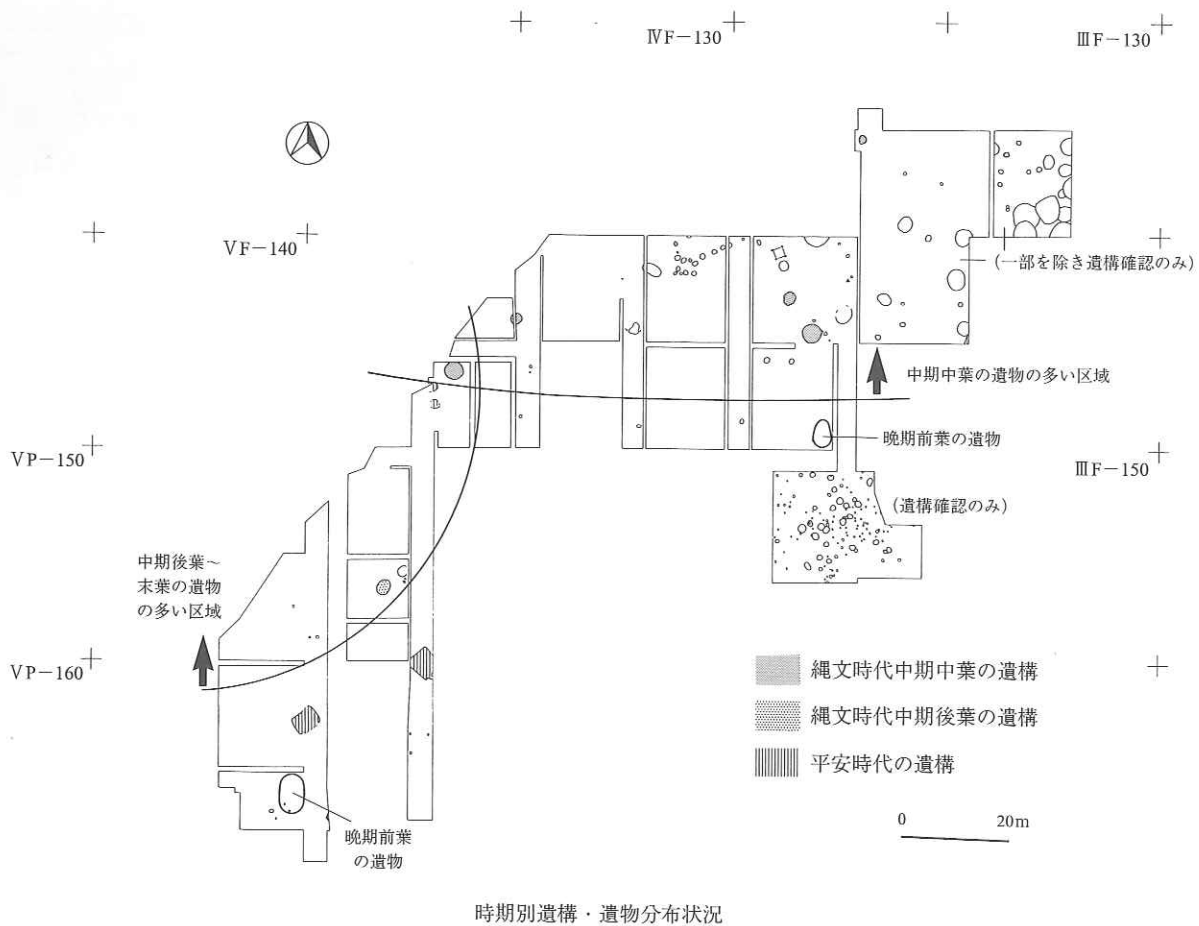
3図 第5次調査区基本層序



作業風景



見学風景



4 図 調査風景及び時期別遺構・遺物分布状況





## 第2節 縄文時代の遺構

### 1) 竪穴住居跡

18棟の竪穴住居跡を確認した。確認した住居跡の大半は、調査区東側の傾斜面に位置する。調査区西側では、縄文時代中期後葉から中期末葉の竪穴住居跡を2棟確認し、調査区東側では中期中葉を主体とする時期の竪穴住居跡を検出した。中期中葉の竪穴住居跡の形態は、円形・楕円形・隅丸方形で径3mほどの小型のものが多い。この住居跡群の分布はさらに東側へと広がるものと考えられる。

以下精査を行った第603号住居跡について述べる。

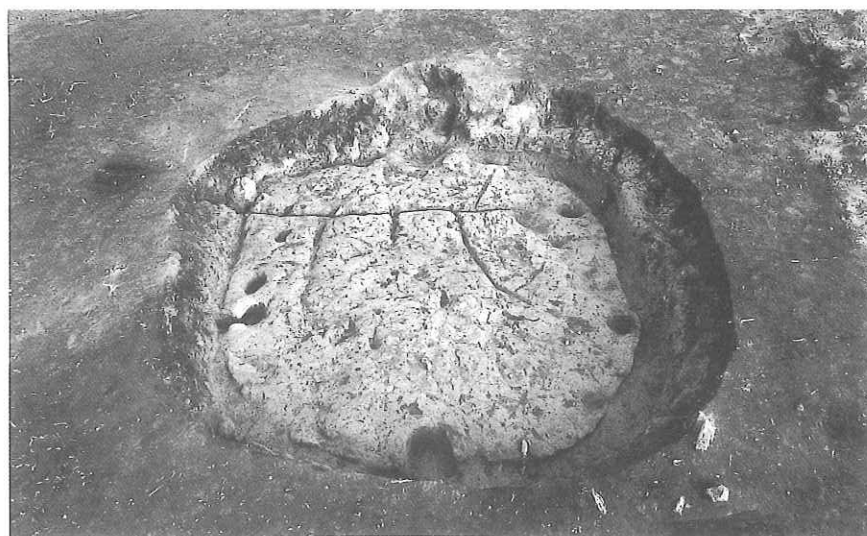
IVB—145に位置し、第Ⅲ層上面で円形の黒色土の落ち込みを確認した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸3m85cm、短軸3m38cm、床面積は10.1㎡である。床面の北側と東側の一部を除き幅約10cm、深さ約7cmの壁溝が巡っている。第Ⅴ層を掘り込み、直接床面として使用しており、ほぼ平坦で非常に堅緻である。床面には南北に伸びる溝を検出した。

炉は確認されなかった。床面から6個のピットが検出された。このうち支柱穴は4個と考えられ、それぞれの深さはP<sub>1</sub>…10cm、P<sub>2</sub>…9cm、P<sub>3</sub>…13cm、P<sub>4</sub>…15cmである。北東壁寄りからは検出されなかった。

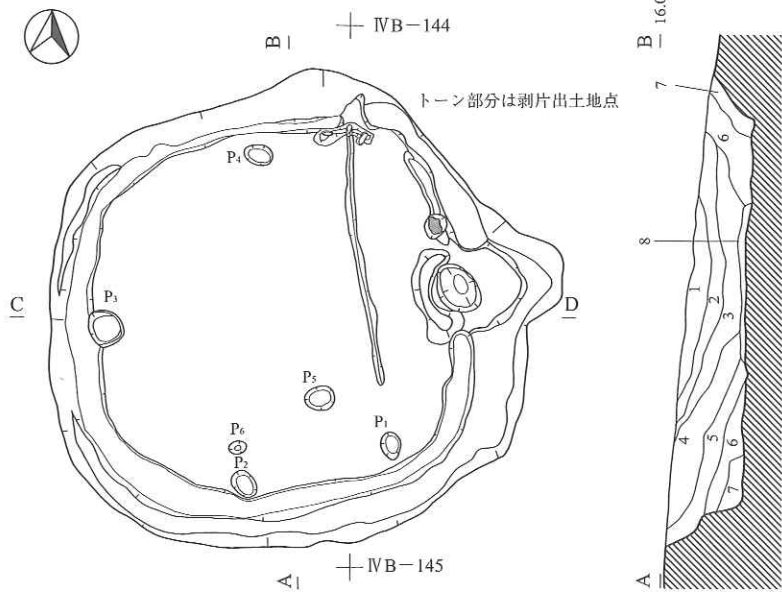
付属施設は、東壁がテラス状の半円形に張り出し、中央には深さ8cmのピットを伴う。ピット西側には高さ6cmの土堤状の盛り土がある。また北壁にも袋状の張り出しがあり、その手前に幅約10cm、高さ約5cmのローム土が盛られ、その上面から敲磨器類2点、石冠1点が出土した。東壁の壁溝端部には深さ4cmのピットがあり、底面から剥片が24点出土した。

堆積土は8層に分層され、ローム・ブロック及び炭化物を多量に含み人為堆積と考えられる。堆積土中から土器、石器が出土している。時期は出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

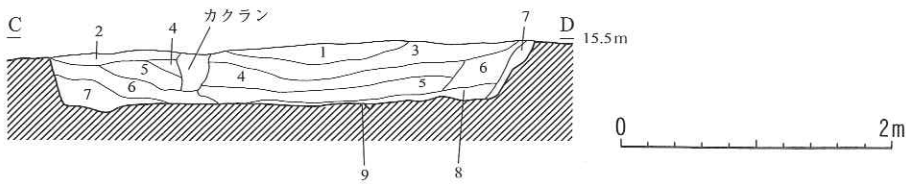
(佐々木 真理子)



6図 第603号住居跡



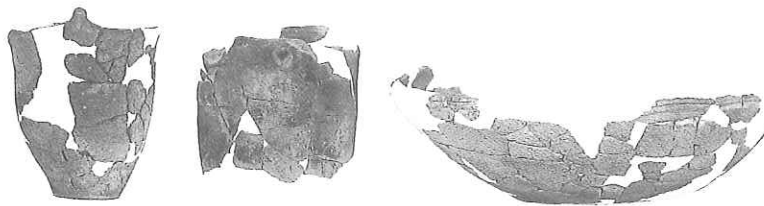
- 第603号住
- 第1層 黒色土 7.5YR1.7/1
  - 第2層 黒褐色土 10YR2/2
  - 第3層 黒褐色土 10YR2/2
  - 第4層 黒褐色土 10YR2/3
  - 第5層 黒褐色土 10YR3/2
  - 第6層 暗褐色土 10YR3/3
  - 第7層 灰褐色土 10YR4/3
  - 第8層 黒色土 10YR2/1
  - 第9層 黒褐色土 10YR3/1



礫石器出土状況



剥片出土状況



堆積土出土土器

7 図 第603号住居跡

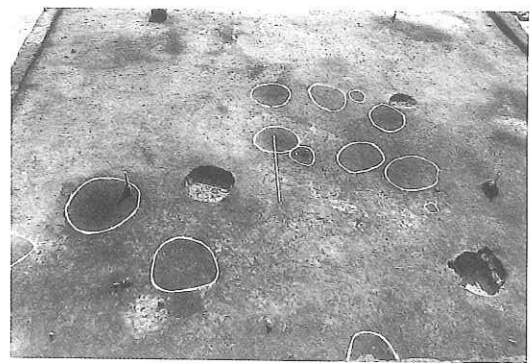
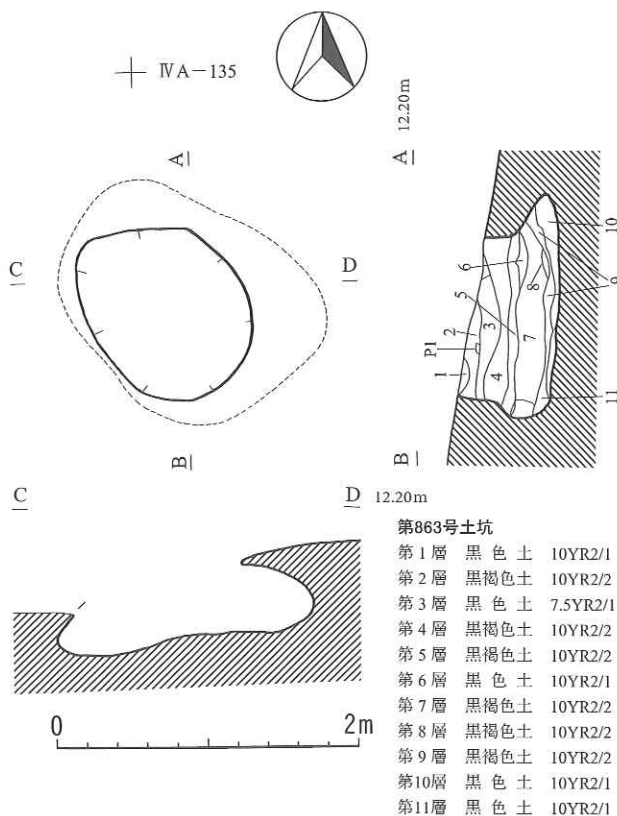
## 2) 土 坑

土坑を53基確認した。調査区中央北側のⅣE～H-140・141に集中し、第Ⅲ層下部で16基確認した。平面形は円形ないし楕円形である。規模は径60cmから1 m30cmで、底面は長径55cmから96cm、短径35cmから84cmで深さ55cm前後である。堆積土にロームブロックや炭化物を多く含み、人為的に埋め戻された可能性が高いものが多い。時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉である。

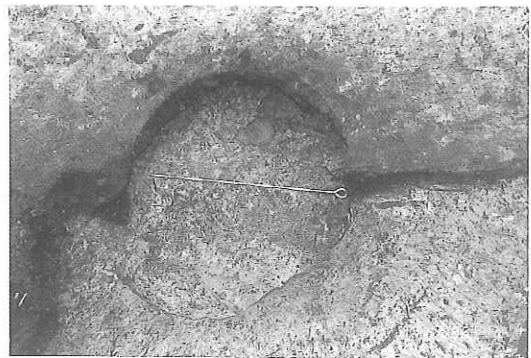
第863号土坑は、ⅢT～ⅣA-135に位置し、第Ⅱ層下部で確認した。土坑の上部東半分は削平されていた。平面形は楕円形で、断面形は袋状である。規模は口径は径1 m20cm、底面は長径1 m42cm、短径1 m35cmで深さ60cmである。堆積土は11層に分層した。4層まではロームブロックと炭化物を多く含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。1層から4層では円筒上層e式土器が出土している。5層以下は、シルトと細砂が互層ないし混在している。出土遺物から縄文時代中期中葉であると考えられる。

土坑群は調査区北側の斜面に位置し、さらに北側へ広がる可能性がある。

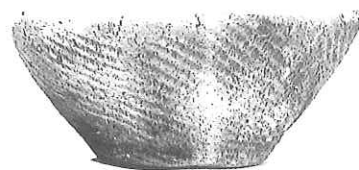
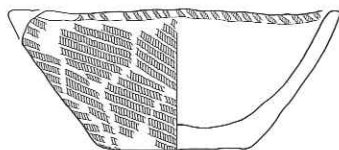
(伊藤 由美子)



土坑群確認状況



第863号土坑完掘状況



8 図 第863号土坑

### 3) 掘立柱建物跡

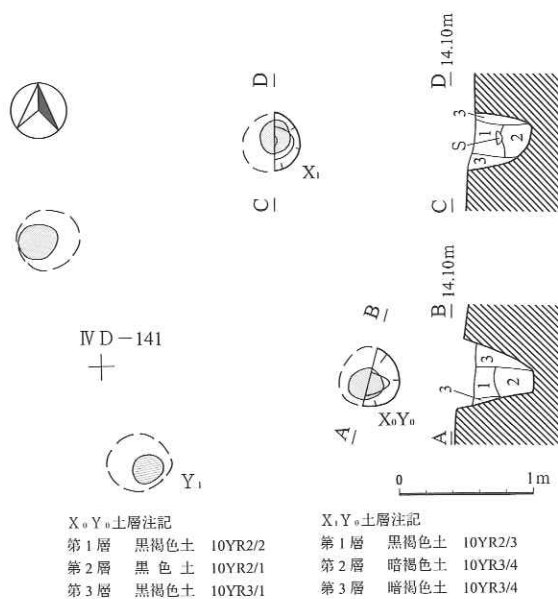
IV C-140~141グリッドで1間×1間の正方形の掘立柱建物跡を1棟確認した(第37号掘立柱建物跡)。ただし、その西側には風倒木痕があり、本来はさらに西側に1間存在した可能性がある。桁方向を東西とすると $X_0Y_0 \sim X_0Y_1$ が176cm、 $X_1Y_0 \sim X_1Y_1$ が190cm、梁方向は $X_0Y_0 \sim X_1Y_0$ が196cmで、 $X_0Y_1 \sim X_1Y_1$ が190cmである。

柱痕跡は4本ともに認められ、いずれも不整形円形を呈する。時期は縄文時代中期中葉の可能性が高い。

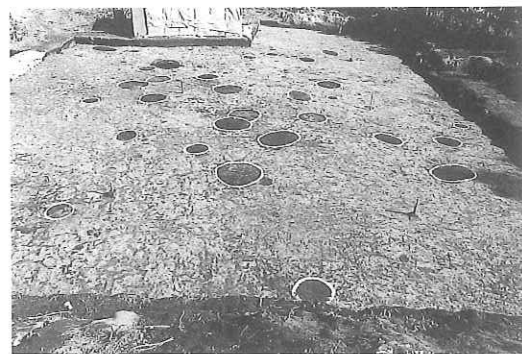
また、調査区南側の平坦面で掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴群を確認した。柱穴は直径が1m前後のもの、20~30cm前後のものからなり、柱痕跡を確認できるものもある。

今年度は遺構確認のみに調査をとどめ、精査は来年度以降に実施する予定である。

(斎藤 岳)



第37号掘立柱建物跡



調査区南側の柱穴群

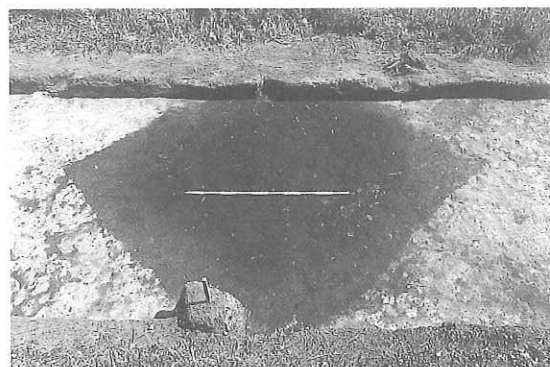
9図 掘立柱建物跡

### 第3節 平安時代の遺構

竪穴住居跡3棟、土坑2基、溝跡1条を確認した。主として調査区の西側に分布している。

なお、第605号住居跡、第879号・第880号土坑、第243号溝跡の確認面からは、白頭山火山灰と考えられる降下火山灰が検出されている。

(斎藤 岳)



10図 平安時代竪穴住居跡

## 第4節 遺構外出土遺物

本調査区からは縄文時代前期・中期・晩期、平安時代、江戸時代の遺物が出土した。

時期ごとの遺物の分布状況を見ると、縄文時代については前期から中期前葉の遺物は調査区西側に散発的に出土している。一方中期中葉の遺物はほぼ全域から出土し、特に調査区中央から東側にかけて多く分布している。中期後葉の遺物は調査区西側及び南側に分布し、中期末葉の遺物は調査区西側に集中する。また、調査区南側からは晩期前葉の遺物も少量出土している。

土器は小破片での出土が多い。接合するものは少なく、全体の器形のわかるものも少ない。

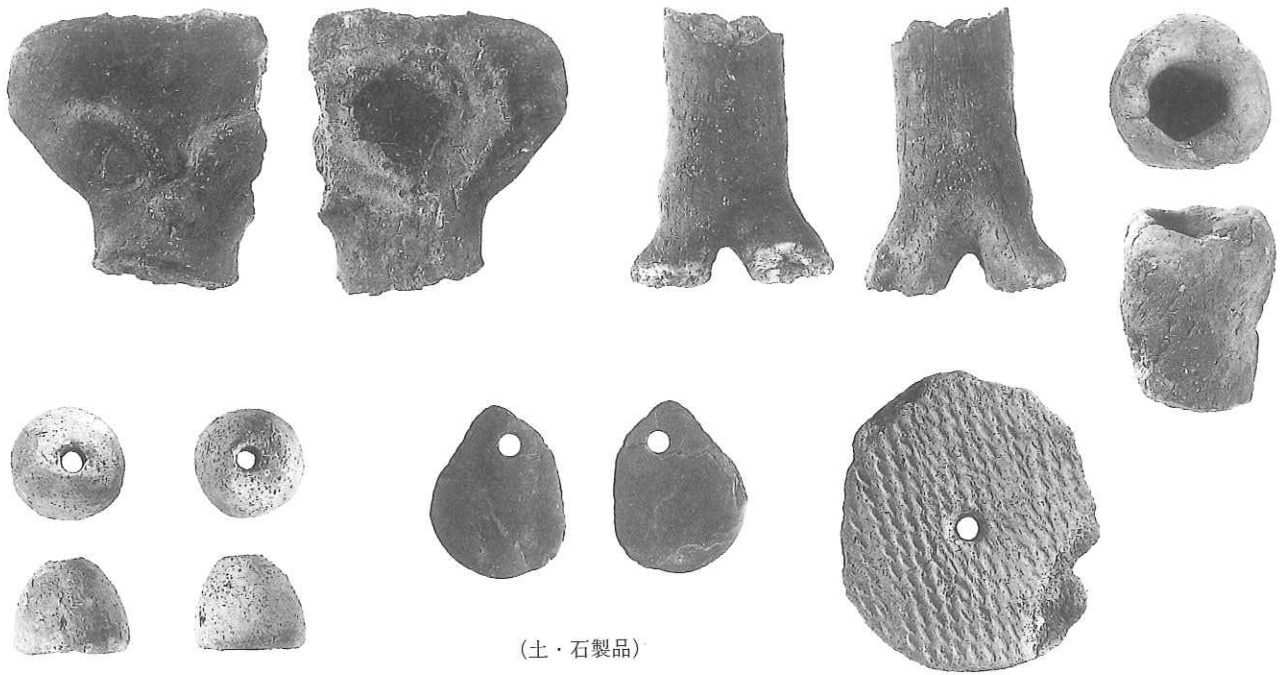
石器は石鏃、石槍、石錐、石匙、不定形石器、敲磨器類、石冠などが出土しており、土偶やミニチュア土器など土・石製品も出土している。

平安時代の土師器及び須恵器は、調査区西側を中心に出土しており、江戸時代の陶磁器片なども少量出土している。

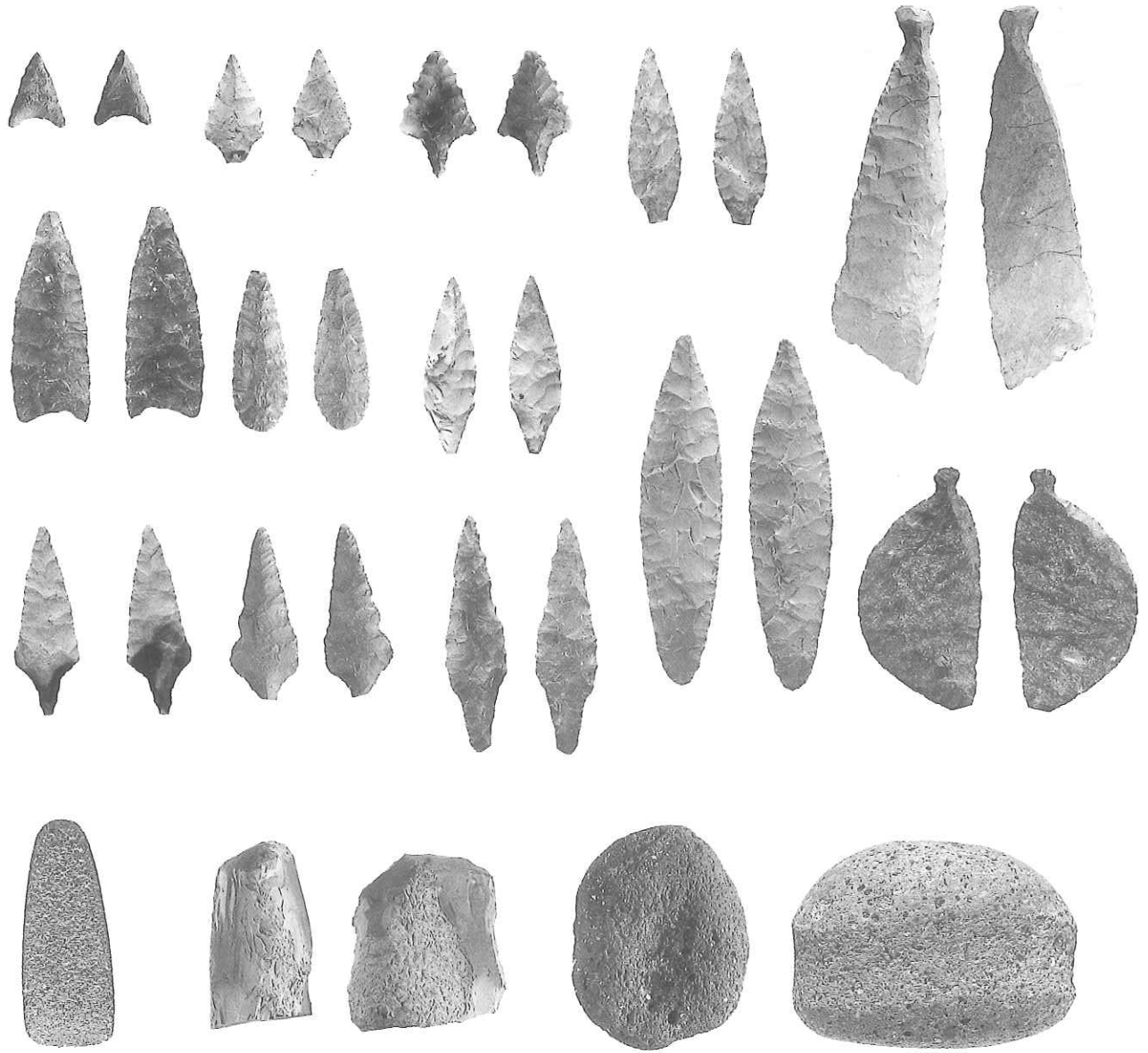
(斎藤 岳)



11図 遺構外出土遺物(1)



(土・石製品)



(石器)

12図 遺構外出土遺物 (2)

# 第IV章 第6次調査

## 第1節 調査の概要

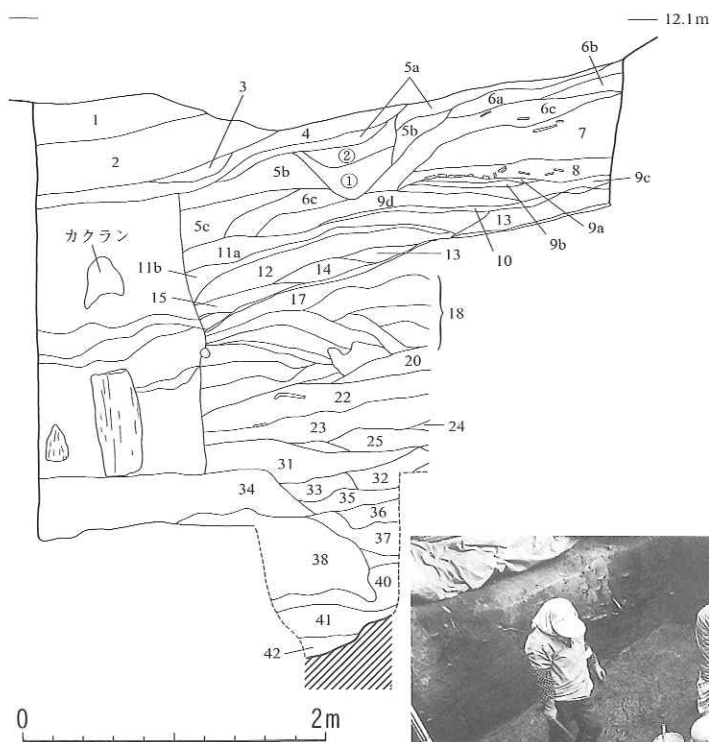
調査区は、平成7年度に調査を行った第1次調査区のうち、西側台地斜面下のテラス状になった地点で、標高は約11.5mである。台地上の平坦面との比高差は約5mである。縄文時代中期から前期にかけての遺物包含層の継続調査として行った。

平成7年度の調査は1.5×4mのトレンチを設定し、縄文時代中期の遺物包含層を検出した。中期中頭の包含層の段階で、深さが約1.6mに達し、包含層はさらに下位へ続くと予想された。しかし、調査面積が狭く、湧水も見られたため、調査を中断し、調査区を拡張して継続調査とすることにした。

平成8年度は調査区を1グリッド(4m×4m)に拡張し、縄文時代前期の遺物包含層と泥炭層の有無、古環境復原のための資料収集を主な調査目的とした。調査期間は、平成8年5月15日から10月9日までで、調査面積は16m<sup>2</sup>である。土層の呼称については平成7年度に従い、上層から順次算用数字を付して表したが、さらに細分できる部分については小文字アルファベットを付して分層した。

検出遺構は、前年度同様に縄文時代前期遺物包含層と、縄文時代中期後半の柱穴が検出された。出土遺物は段ボール箱で約80箱分である。

(小笠原 雅行)

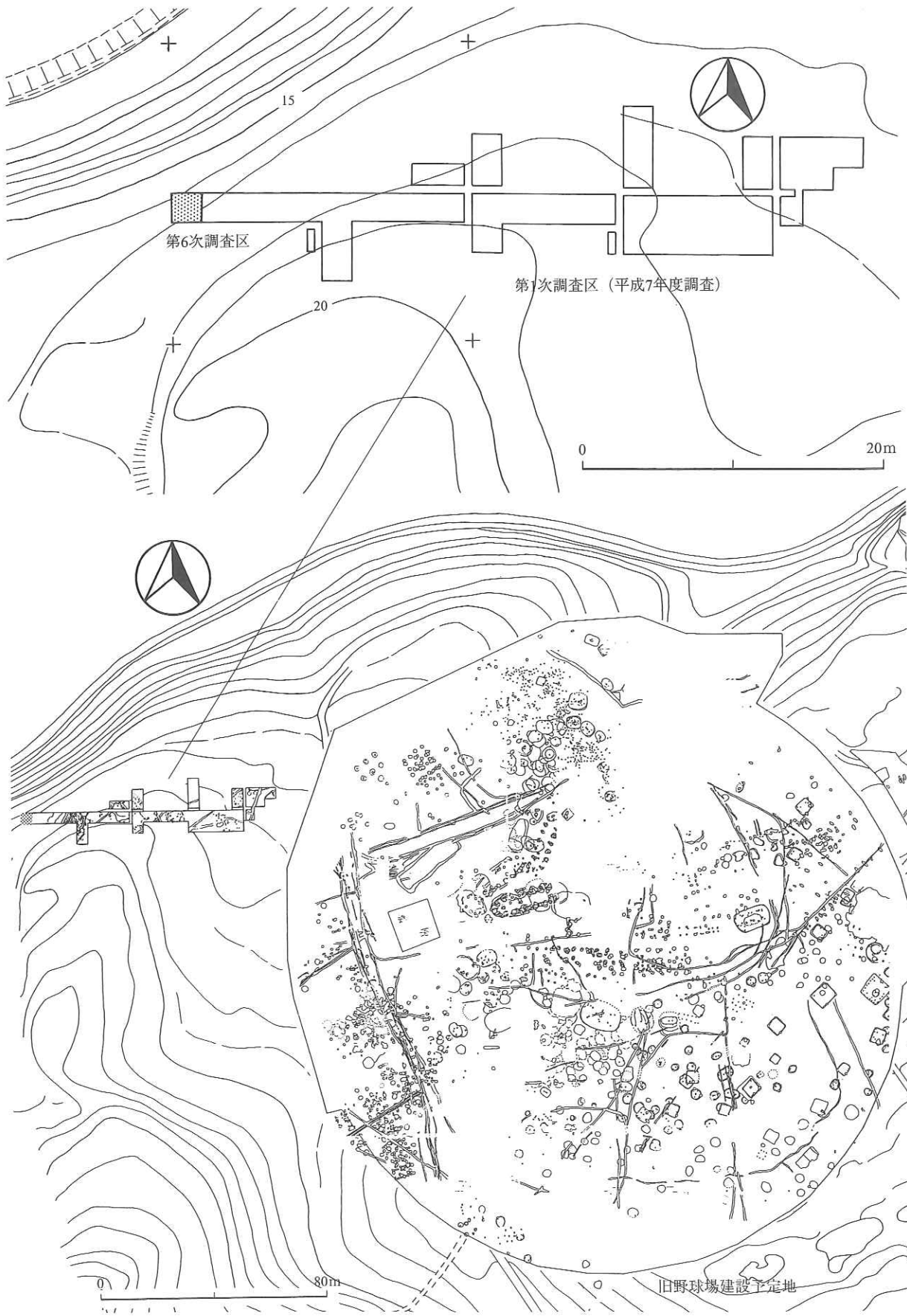


第1層	暗褐色土	10YR3/3	第15層	暗褐色土	10YR3/4
第2層	黒褐色土	10YR2/3	第16層	赤褐色土	10YR4/6
第3層	暗褐色土	10YR3/4	第17層	褐色土	10YR4/4
第4層	黒褐色土	10YR3/2	第18層	黒褐色土	10YR3/2
第4a層	にぶい黄褐色土	10YR4/6	第19層	〃	10YR2/3
第5a層	黄褐色土	10YR5/6	第25層	黒色土	10YR2/1
第5b層	褐色土	10YR4/6	第26層	黒褐色土	2.5Y 3/2
第5c層	明黄褐色土	10YR6/6	第27層	〃	10YR2/2
第6a層	〃	10YR6/8	第28層	にぶい黄褐色土	10YR4/3
第6b層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	第29層	黒褐色土	10YR3/1
第6c層	褐色土	10YR4/6	第30層	褐色土	10YR4/4
第7層	暗褐色土	10YR3/4	第31層	黒褐色土	10YR3/2
第8層	褐色土	10YR4/4	第32層	暗褐色土	10YR3/3
第9a層	黄褐色土	10YR5/6	第33層	〃	10YR3/4
第9b層	黒褐色土	10YR2/3	第34層	黒褐色土	10YR2/2
第9c層	褐色土	10YR4/6	第35層	暗褐色土	10YR2/3
第9d層	暗褐色土	10YR3/4	第36層	灰黄褐色土	10YR4/2
第10層	黒褐色土	10YR3/2	第37層	黒褐色土	10YR3/1
第11a層	褐色土	10YR4/6	第38層	〃	10YR2/2
第11b層	黄褐色土	10YR5/6	第39層	〃	10YR3/2
第12層	褐色土	10YR4/6	第40層	灰黄褐色土	2.5Y 4/2
第13層	黄褐色土	10YR5/6	第41層	黒褐色土	10YR3/1
第14層	褐色土	10YR4/6	第42層	灰黄褐色土	10YR4/2



作業風景

13図 第6次調査区北壁土層断面



14図 第6次調査区位置図



## 第2節 縄文時代の遺構

### 1) 柱穴

調査区北西壁際から、柱穴の一部が検出された。掘り方は直径120cm以上、深さ約160cmである。掘り込みは、底面が湧水のある層まで達していたため、木柱が非常に良好な状態で残存していた。柱規模は直径60cm以上、残存長70cmである。残存部上側には一部炭化した痕跡が観察される。鑑定の結果、樹種はクリである。

埋土は、前・中期遺物廃棄ブロックを掘削し、埋め戻しているため、埋土と掘り方外の識別が平面・断面とも非常に難しい。包含層の埋め戻し土であるため、埋土には土器片が多量に混入する。当初、木柱は包含層中では前期の層に相当する層位で検出されており、残存した木柱の上部には黄褐色粘土が堆積し、掘り方の立ち上がり不明瞭であった。しかし、酸化鉄の層の状態、混入する炭化物の状態が掘り方の内外で異なり、断面観察による掘り込み面の確認と埋土内からの出土土器から、縄文時代中期のものだと判断した。さらに、掘り込み面の上部は最花式期の第4層が覆い、最花式から榎林式期の第5b層を切る。そのため、柱穴の構築時期は榎林式期から最花式の縄文時代中期後葉と考えることができる。

掘り込み面の標高は約11mである。

(小笠原 雅行)



柱穴 断面



木柱 拡大

15図 木柱出土状況

## 2) 遺物包含層

今年度調査した部分では、平成7年度と同様に中期遺物包含層が検出された。第Ⅱ層に相当する2層の黒色土中では、中期末葉の大木10式併行期の包含層を検出した。大量の土器の他に、石器、土偶などが出土している。土器はすべて破片で出土し、復元し得るものはない。この第Ⅱ層の黒色土は更に4層に分層できたが、出土遺物のほとんどは第2層からの出土である。

第Ⅲ層に相当する層は、台地北斜面（第6鉄塔地区）と同様、黄褐色ロームの二次堆積土を主体とし、他に炭化物、黒色土などによって形成される。台地平坦面の盛土では、各々の層が細かく明瞭に分離できる。しかし、台地斜面部では、盛土ほど細かな分層はできない。各層を時期別に見ると、第5層は最花式期、第6b層は榎林式期、第6c層は円筒上層d式期、第7・8層は円筒上層b式期、第9層は円筒上層a式期、第11層以下は円筒下層d<sub>2</sub>式期の包含層となっている。遺物は、復元可能な土器は第8層の層理面から多量に出土し、破片で出土するものの多くは、層中に混入した状態で出土した。また、第5a、6a、11b層など、純黄褐色ローム層では遺物の出土は僅少で、炭化物・黒色土が混入する層では、比較的土器の出土量が多い。また、石器の出土は極めて少なく、その他の遺物の出土も少ない。

第12～15層と第17層の間には、酸化鉄層が形成され（第16層と呼称した）、以下の層は湧水が見られる。黒色土を主体とし、砂、粘土が純粹な層を形成する部分も見られる。全体的に炭化物が多量に混入する。堆積状況としては、水の影響を大きく受けた自然堆積状を呈する。

調査途中に湧水による壁の崩落があり、危険であったため、調査面積を縮小し、1×1.5mを調査対象とし、地山まで掘り下げた。時期別に見ると、先の第11層から第17層までが円筒下層d<sub>2</sub>式期、第27層までが円筒下層d<sub>1</sub>式期、第28層が円筒下層c式、以下の層は円筒下層c式～円筒下層b式期（胴部の細片のみで詳細は不明）である。出土遺物としては、第28層から円筒下層c式がまとまって出土した以外は、細片で少数出土する程度である。また石器の出土量は非常に少ない。

有機質遺物は、第19層からヒトの歯が2点（鑑定の結果、40代男性臼歯、乳歯臼歯）出土した。また、第21層から骨刀が、第28層から漆器が出土した。素地は残存していない。動物骨、魚骨は発掘調査段階では微量出土している。なお、第17層以下の土壌はサンプルとして回収し、現在水洗選別を進めている。

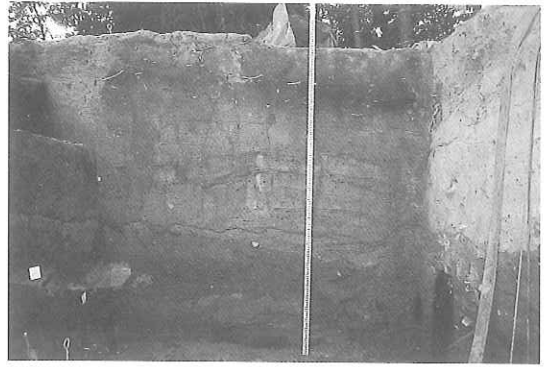
調査の結果、縄文時代中期の遺物包含層は本調査区から第6鉄塔地区、さらには台地北側の谷の縁まで約270m以上続いていると考えられ、台地南西側へさらに続いていると思われる。時期ごとの堆積状況は中期中頃の包含層が非常に薄く、これが时期的な多寡によるものか、削平の結果によるものかは調査面積が狭少なため明らかにできない。

また、第6鉄塔部分で見られた円筒下層a・b式期の大規模な遺物廃棄ブロックが確認されず、棄て場の範囲や、时期的な分布の差異があるものと思われる。

（小笠原 雅行）



土層断面（北壁）



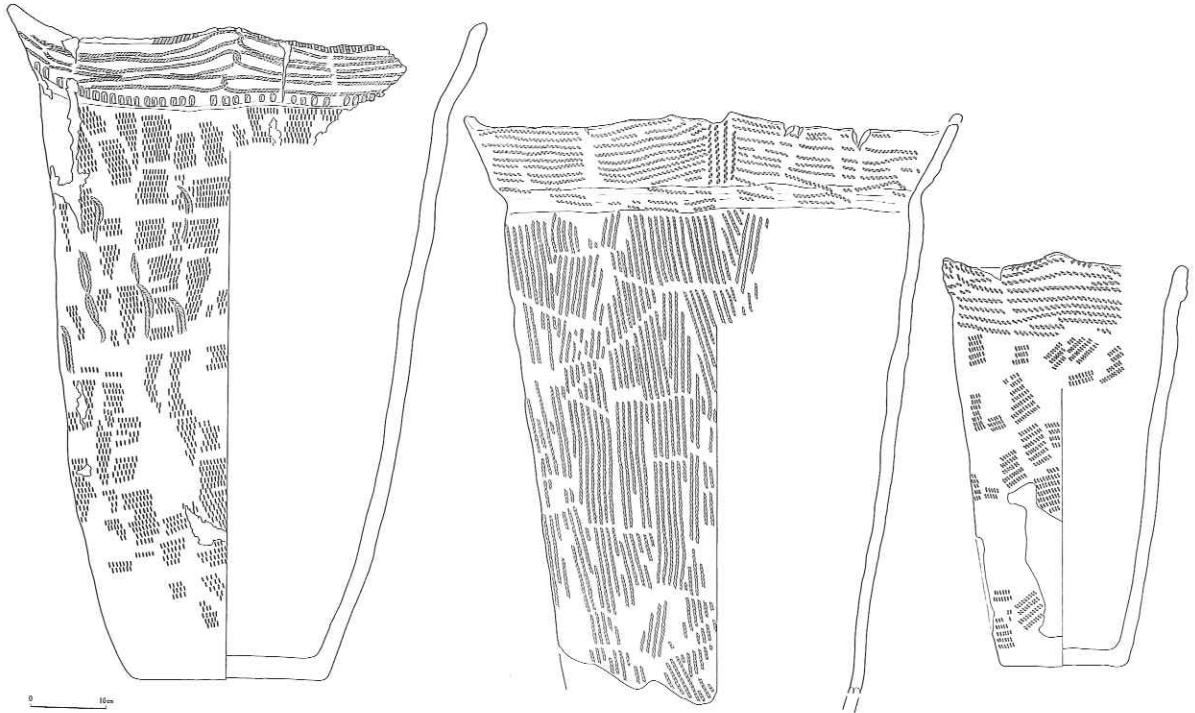
土層断面（西壁）



第8層遺物出土状況

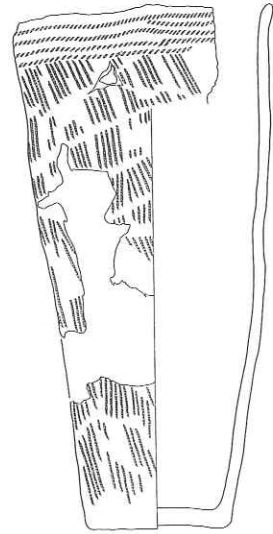
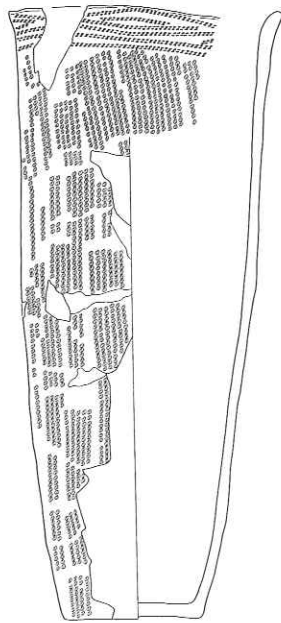
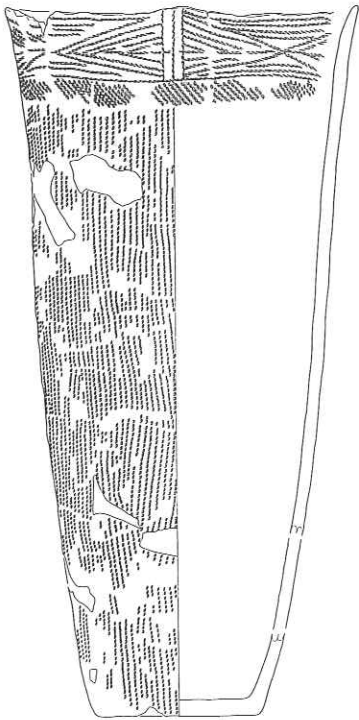
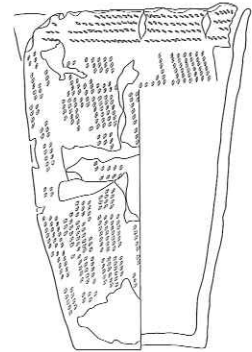
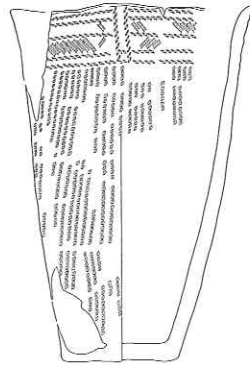


骨刀出土状況



第18層 出土土器

16図 第6次調査状況・出土遺物



0 10cm  
スケールは  
実測図のみ



17図 第28層出土状況・出土土器

# 第V章 第7次調査

## 第1節 調査の概要

本調査区は、平成7年度に行った土坑墓の範囲確認調査の継続調査である。調査期間は、平成8年10月11日から11月1日までである。昨年度確認した土坑墓東端から約27mのところにトレンチを設け、土坑墓を確認し次第、東側へトレンチを設定した。

今回検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑墓と考えられる土坑が34基、性格不明の土坑5基、埋設土器1基、配石遺構5基（うち、2基は土坑墓を伴うと考えられる）、道路状遺構1条、平安時代の竪穴住居跡8棟、時期不明の溝跡2条である。

調査区のほとんどは畑の耕作により、黒色土部分が攪乱を受けていたため、遺構の確認はローム面で行ったものが多い。東端のトレンチでは第Ⅱ層以下が良好な状態で残っていたが、土坑墓の上部構造は検出されなかった。

土坑墓の認定に当たっては、平面観察による形態、分布、配列、堆積土の状況等から判断した。具体的には、楕円形ないしは隅丸長方形を呈し、これまで確認した延長上に列状配置に分布し、ロームブロックを多量に含むなど埋め戻しの状況を示すことなどによる。

精査は土坑墓2基を半截、1基を完掘した。当初、土坑墓は尾根筋部分で検出されていたことから、尾根に沿ってトレンチを設定した。しかし、確認できた土坑墓の東限は、舌状台地東側の縁の谷状に窪んだ部分へ落ち込むように延びていた。遺跡の範囲は、平成5年度に青森市教育委員会により行われた都市計画道路付近が東限であり、そこは台地の先端部に位置する。今回の調査区の東端から遺跡範囲東端までは約30m程である。

(小笠原 雅行)



18図 調査区空中写真

## 第2節 縄文時代の遺構

### 1) 土坑墓

確認した土坑墓は、2列の列状に分布する。また、精査した土坑墓では、底面は列の間に向かって低く傾斜する。土坑墓の配置を見ると、南側の列は北側に比べ密な配置であるが、北側の列は間隔が2m程度開く部分もあり、ばらつきが見られる。

2列の間は、幅8m50cmから9m20cm、深さ30cmから40cmの溝状の落ち込みが検出された。底面は、地山の上位火山灰が削平され、その下の火山灰が露出している。さらに上位火山灰が、貼り付けられたような部分も見られる。本遺構の時期であるが、確実に伴った出土遺物はない。堆積土には、縄文時代中期末葉（大木10式併行）以降に形成される第Ⅱ層が入り込むことから、縄文時代中期末葉以前には廃棄されたものと考えられる。地形的には尾根筋に当たる所であり、列の間が自然の状態で削られたとは想定しにくく、人為的な要素が強い。その場合、2列の墓の間を削って造った道としての用途が考えられる。

今回、配石を伴った土坑墓も確認された。土坑墓の周囲を20~30cm大の礫が、長軸側の一方に直線状ないしは半弧状に巡る。全周するものではなく、畑の耕作などにより表土が削平されたことによる石の移動等の影響が大きいものと思われる。列の間の道路状の窪みとの構築の時間的な関係であるが、断面観察によると、貼り付けられたような状態を示す黄褐色火山灰の上面に石が乗る。ただし、道路状の窪みと土坑墓の掘り込み面との関係は明らかにし得なかった。確実に土坑墓と配石が同時に構築されたものとするれば、道路状の窪みを切って土坑墓が構築されていることになる。

確認できた土坑墓列の東端は沢状の落ち込みへ向かって延びて行く。そこは1列のみの確認であるため不明な点もあるが、配列と半截した土坑墓の底面の傾斜から、北側の列の可能性が高い。これまでの調査により土坑墓列は、緩やかに蛇行しながら、総延長で約355mまで延びていることが確認された。

また、円筒上層d式期の埋設土器も1基のみであるが検出された。

ここでは重複関係にあり、完掘した第928号土坑、第805号埋設土器の事実記載を行う。

第928号土坑、第805号埋設土器とも、ⅢD-77に位置する。地山ローム層まで下げた段階は、第805号埋設土器の西側半分と、第928号土坑の平面形、堆積土中に散在した、同一個体片の広がりとして確認した。これら2つの遺構は、堆積土の断面観察から、第928号土坑が新しく、第805号埋設土器が古い。

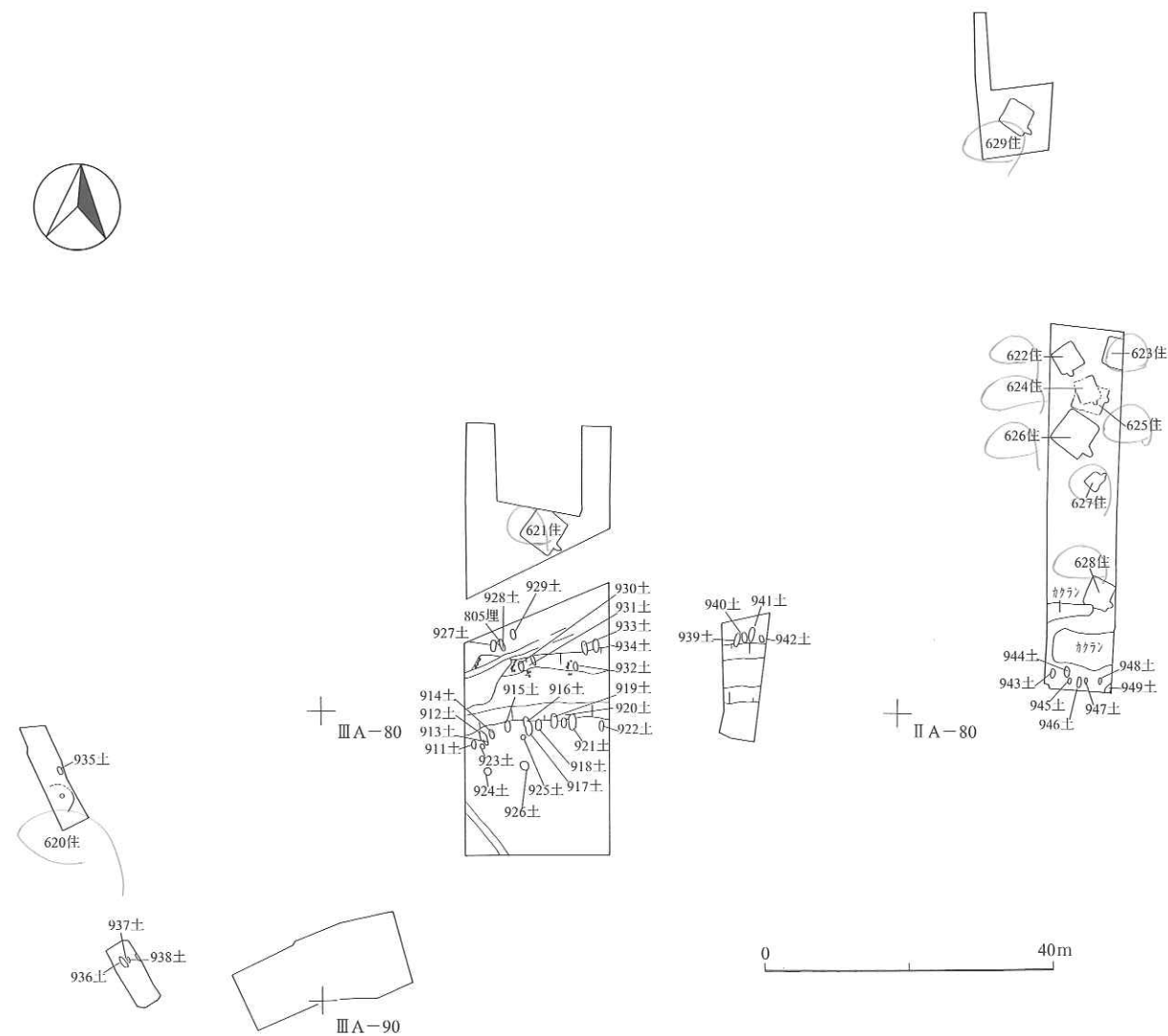
第928号土坑は隅丸長方形を呈し、規模は長軸が1m76cm、短軸が56cmである。壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、南側へ向かって低く傾斜しており、土坑の深さは、北側で12cmであるのに対し、南側では25cmと深くなっている。この土坑は北側の土坑墓列に含まれ、先に述べた列の間に向かって傾斜するというこれまでの調査所見に合う。堆積土はロームブロックを多量に含み、全体としては褐色から黄褐色を呈する。出土遺物は、第805号埋設土器片が確認面から堆積土中まで散在して混入する。埋設土器は円筒上層d式期のものであるため、本土坑はそれより新しいものと判断される。

## 2) 埋設土器

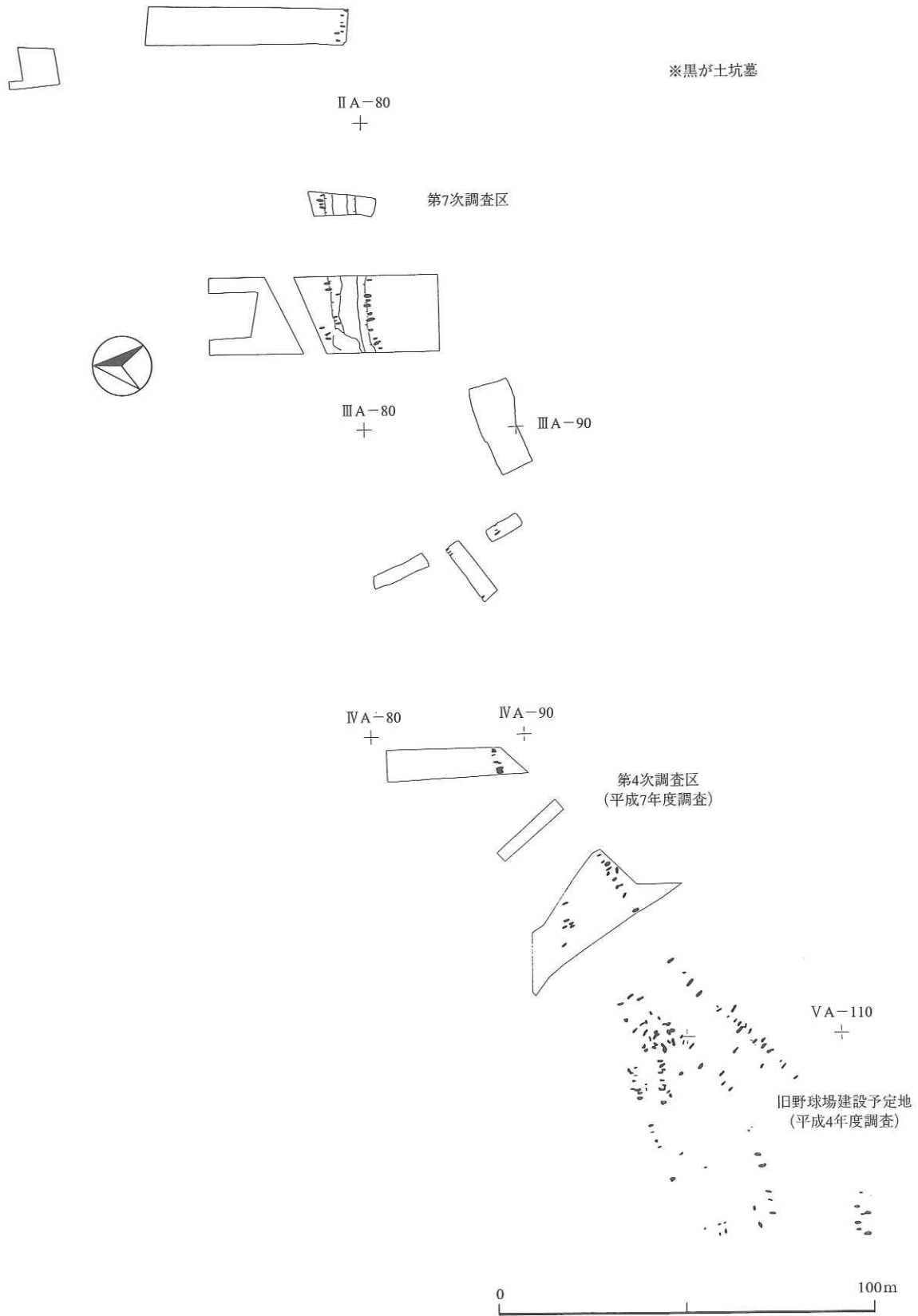
第805号埋設土器は、正立状態で埋められ、掘り方は径60cmぐらいの円形を呈する。深さは約10cmである。掘り方及び土器内部の堆積土は暗褐色土である。土器は口縁部が欠失するが、胴部片の特徴から、円筒上層d式と判断される。

土坑墓の時期は、精査遺構数が少なく、そのうえ出土遺物が僅少であるため、不明な点が多い。今回の調査では、円筒上層d式期の埋設土器を切る土坑墓が検出され、墓の埋土中には埋設土器片が混入している。土坑墓の構築時期、配列順を考えるうえで、良好な資料である。

(小笠原 雅行)

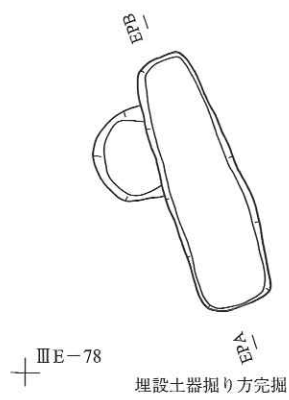
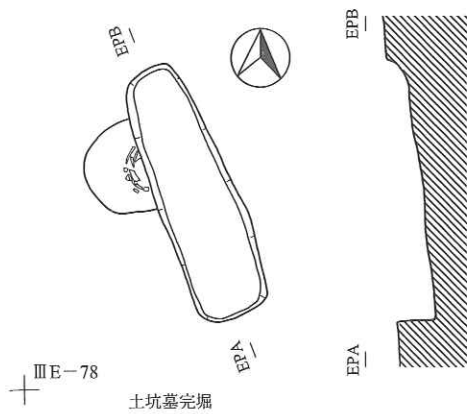


19図 第7次調査遺構配置図

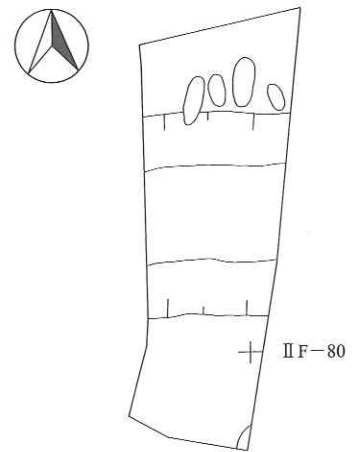
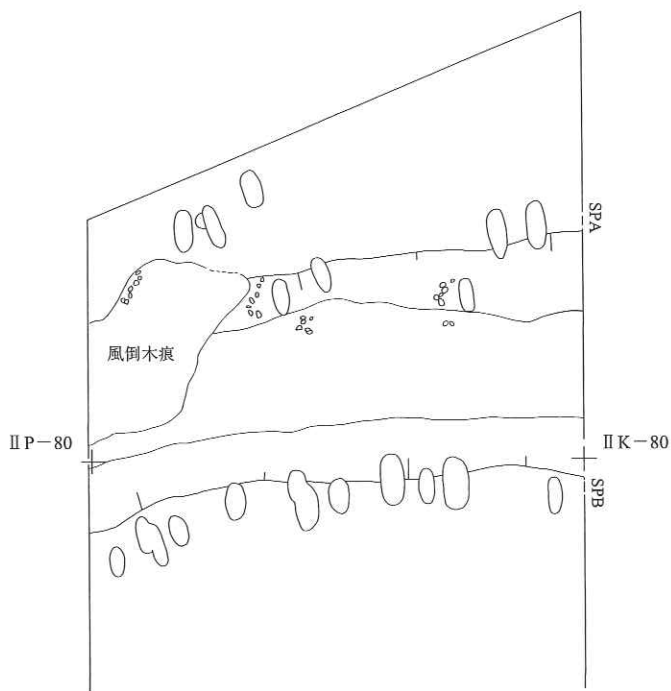


20図 土坑墓配置図

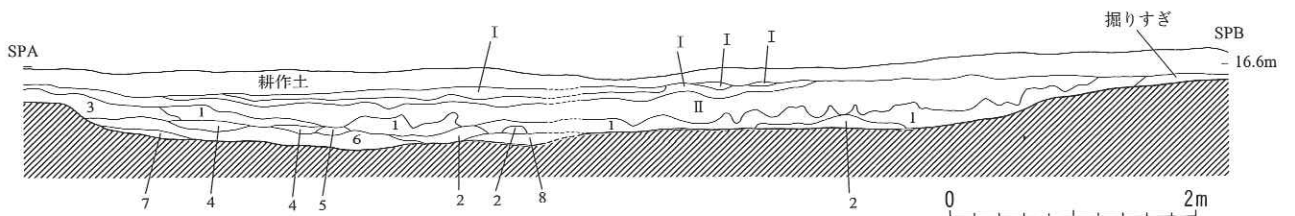




0 2m



0 10m

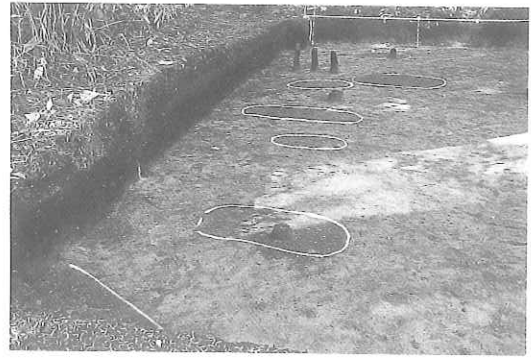


- 第1層 黒褐色土 10YR3/1
- 第2層 濃い黄褐色土 10YR4/3
- 第3層 黒褐色土 10YR2/3
- 第4層 褐色土 10YR4/4
- 第5層 黒色土 10YR2/1
- 第6層 黄褐色土 10YR5/6
- 第7層 黄褐色土 10YR5/8
- 第8層 褐色土 10YR4/4

21図 道路状遺構



土坑墓列・道路状遺構



最東端の土坑墓



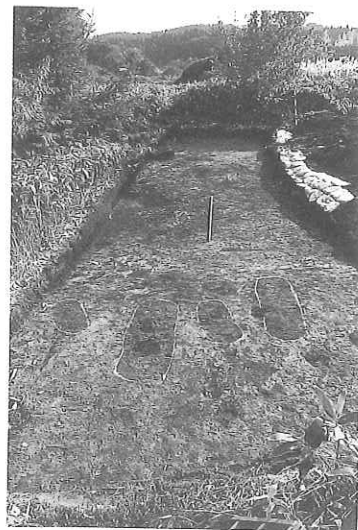
第928号土坑・第805号埋設土器



同左 拡大



同上 完掘



土坑墓列（北列側から）



配石を伴う土坑墓

22図 第7次調査区

### 第3節 平安時代の遺構

平安時代の竪穴住居跡は、最も東側に設定した調査区から主に検出されている。上部が大きく削平されているため、貼床部・カマド火焼面が辛うじて残存しているものが多い。確認のみで止めているため、精査した遺構はない。確認段階で規模は最大で一辺5m50cm、最小で一辺2m55cmのものまである。

平安時代の竪穴住居跡の分布を見ると、北地区（旧野球場建設予定地）の北の谷から、東側へと拡がっているものと考えられる。

(小笠原 雅行)



作業風景



住居跡 確認状況



住居跡 確認状況



住居跡 確認状況

23図 第7次調査区調査状況

## 第Ⅵ章 調査の成果と課題

平成8年度の調査は集落の規模や変遷を解明するため第5次から第7次の3地点で行った。調査面積はあわせて7,626㎡であり、出土遺物は縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器などダンボール箱で131箱である。

各調査区毎の成果と課題は次のとおりである。

### (1) 第5次調査

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、掘立柱建物跡などのほか、平安時代の竪穴住居跡などを確認した。

縄文時代の遺構では、竪穴住居跡は調査区東側の傾斜面に集中する。調査区東側の調査は今年度は遺構確認にとどめたが、分布する遺物が縄文時代中期中葉のものが中心であることや、調査区中央部で精査した竪穴住居跡が同時期であるので、竪穴住居跡群は縄文時代中期中葉を主体としていると考えられる。

土坑は調査区中央北部の湿地に面した台地縁辺部に集中する。その形態は袋状や鍋底状を呈するものなど一様ではなく、規模も長軸60cm程度のものから2mを越えるものまである。土坑群は縄文時代中期中葉を主体とし、調査区域からさらに北側に伸びると考えられる。

柱穴は調査区南側の平坦部に密集し、それらは掘立柱建物跡の可能性はあるが、今年度は確認のみで終了したため、精査を行い建物構造や時期などを明らかにすることが必要である。

### (2) 第6次調査

今回の調査では、大規模な遺物包含層（縄文時代中期全般及び前期円筒下層c・d式期）が検出された。縄文時代中期段階の包含層としては、これまでの調査所見（旧野球場建設予定地、第6鉄塔地区）と合わせ、少なくとも270mにわたって延びていることが確認された。しかも約1.6mもの厚さに達し（第6鉄塔部分では約2.3m）、非常に大規模である。土器型式ごとによる厚さの差は見られるものの、長期間継続的に形成されている。

この縄文時代中期包含層から出土する遺物は、圧倒的に土器が多く、石器、その他の遺物は非常に少ないことが特徴として挙げられる。また、堆積はかなり厚い（20～30cm）単位でしか分層できない。台地上に形成される盛土とは、平坦面と斜面部という形成される場所の違いとともに、その内容に違いがある。

縄文時代前期の包含層は、湧水が激しく、有機質遺物の出土も見られた。包含層形成時期は、円筒下層c・d式期のものであり、少なくとも円筒下層b式の前段階あるいは円筒下層a式期の包含層は確認されなかった。これは、第6鉄塔地区の調査所見とは大きく異なるものである。縄文時代前期の包含層からは、ヒトの歯（40代男性臼歯、乳歯臼歯）、骨も出土した。北地区（旧野球場建設予定地内）の北側の谷からもヒトの骨などが出土しており、関連して検討すべき点で、今後さらに調査・分析を続けなければならない。

調査区北西壁から検出した柱穴及び木柱は、今のところ1本のみの検出である。第IV章で述べたように、柱穴、木柱とも非常に規模の大きなものであることから、簡易な施設であるとは考えにくいと思われる。また、柱穴の掘り込み面が標高約11.5mであり、標高18~20mの台地平坦面から見ると、かなり低い場所である。また、沖館川の河川敷までは比高差約2.5mの小さな崖となっている。この遺構の機能・用途・性格などについては、今後の調査を待って検討したい。

### (3) 第7次調査

土坑墓については、これまでの北地区（旧野球場建設予定地）、第4次調査区の調査所見と同様の特徴を示す。今回の調査では、2列の間に深さにして約30cm程の道路状の落ち込みを確認した。これは人為的な要素が強く、土坑墓に伴うと考えられる。これは、本遺跡内の運動公園西駐車場部分（2図参照）、北地区でかつて指摘されたことと共通する。

配石を伴った土坑墓も確認された。いずれも2列のうち、北側の列に集中し、旧野球場地区で見られた同様の遺構が北側列に属することも注目される。また、埋設土器が1基確認された。旧野球場地区で検出した埋設土器の調査所見では、土坑墓とそれほど離れていない所に分布していた。昨年度実施した第4次調査区では埋設土器は確認されておらず、もともと存在しなかった可能性が高い。今回の調査区から検出された埋設土器は、旧野球場地区で確認したものから約100m離れたところにあり、埋設土器の用途と分布域を考える上で非常に興味深い資料である。

土坑墓列の形成時期の下限はこれまでの所見から円筒下層d<sub>1</sub>式、上限は今回の調査での遺構の重複関係から、円筒上層d式以降までとしてとらえられる。上限が不確定であるが、西駐車場部分（昭和51年度調査）が榎林式を中心とした時期と見られる。同時期にも併存したのか、時期的な差異があるのかは今後さらに検討しなければならない。

土坑墓列は約355m続いていることが確認された。東西に長く延びる土坑墓列の形成過程としては、出土遺物から考えると、集落中心部から東側へと延びていった可能性が高いと思われる。また、道路状の遺構は、配石遺構との重複関係から、道路状の遺構が構築された後に配石遺構を構築しているものがある。集落、特に土坑墓列及びそれに関わる遺構の範囲の拡大を知る上で良好な資料が得られた。

列の東端は未だ確認できていないが、台地が途切れる東側の、東西に開析された谷状の落ち込みへ向かって延びて行く。北側列と見られる1列のみ確認した土坑墓は、谷状に落ち込む北側の縁に分布する。本調査区から東へ約20~30mの地点に当たる部分が、平成5年度に市教育委員会により調査されており、その際には土坑墓は確認されていない。遺跡東端までは今回の調査区東端から約30mほどあり、今後の調査が期待される。

(担当者一同)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	さんないまるやまいせき
書 名	三内丸山遺跡Ⅶ
副 書 名	第5次～7次調査概要報告書
巻 字	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第229集
編 著 者 名	岡田康博・斎藤岳・小笠原雅行・伊藤由美子・佐々木真理子
編 集 機 関	青森県教育庁文化課
所 在 地	青森市新町2丁目3番1号 TEL 0177-77-5077
発 行 年 月 日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんないまるやまいせき 三内丸山遺跡	あおもりけんあおもりし おおあざさんないあざまるやま 青森県青森市大字三内字丸山	02201	01021	40° 48' 40"	140° 42' 20"	1996.5.15 ～ 1996.11.1	7,626	集落規模・変遷解明のための学術調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三内丸山 遺跡	集落跡				縄文時代前・中期の巨大集落跡 3地点(5～7次)にわたる調査
第5次調査		縄文時代  平安時代  近世 時期不明	竪穴住居跡 18棟 土 坑 53基 埋設土器 1基 掘立柱建物跡 1棟 柱 穴 133基 屋 外 炉 1基 焼土遺構 4基 住 居 跡 3棟 土 坑 2基 溝 跡 1条 柱 穴 4基	縄文土器 (前・中・晩期) 石 器(中期) 土 偶(〳) 土・石製品(〳) 土師器(平安時代) 須恵器(〳) 近世陶磁器	縄文時代中期住居跡群の確認 〳 中期土坑群の確認 〳 柱穴群の確認
第6次調査		縄文時代	柱 穴 遺物包含層 1	縄文土器(前～中期) 石 器(〳) 骨 刀(前期) 漆 膜(〳) 人 骨(〳) 動物・魚骨(〳) 木 柱(中期)	縄文時代前～中期の遺物包含層 の確認 縄文時代前期泥炭層の確認
第7次調査		縄文時代  平安時代 時期不明	竪穴住居跡 1棟 土 坑 40基 埋設土器 1基 道路状遺構 1条 竪穴住居跡 9棟 溝 跡 2条	縄文土器(中期) 石 器 土師器(平安時代)	縄文時代土坑墓群の広がり確認 (西端～東端は355m以上と確認)

---

青森県埋蔵文化財調査報告書第229集

## 三内丸山遺跡Ⅵ

—第5次～7次調査概要報告書—

発行日 平成9年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県教育庁文化課

〒030 青森市新町二丁目3-1

印刷所 東北印刷工業株式会社

〒030 青森市合浦一丁目2-12

---